

タイ留学に関する報告書

2006年11月2日

高知工科大学 社会システム工学科4年

井上亜寿沙

私の留学先はタイ国タマサート大学シリントン国際工学部(以下 SIIT)でした。国際工学部というだけあり、全ての講義は英語で行われ、学生も英語を話します。私はここで6月7日から10月12日までの約4ヶ月間過ごしました。

今回の私の留学目的は、自分の英語能力・コミュニケーション能力を向上させることでした。というのも、私の夢は海外で日本人技術者として働くことだからです。もちろん今までも、日本で継続的に英語を学んではいました。ところが会話となるとまるでダメで、話そうとすると緊張から頭が真っ白になってしまって黙り込んでしまうのです。私は、これに関しての最も効果的な解決方法は、留学して自分の身を英語の中に置くことだと考えました。そしてそれは必ず、私の英語能力と会話に対する恐怖心を払拭してくれると確信していました。今回、私はこの当初の目標に対すること、そして工学的視点から私が感じたこと、そしてKUTとSIITを比較して感じたことの3つに関して報告をしたいと思います。

まず1つ目の目標に関してですが、私は達成できたと考えています。なぜなら、留学当初、留学先の国際交流センターの方のお話を1度では聞き取れず、3度ほど言葉を変えスピードを変え説明してもらわなければ理解できなかったのが、帰国の時には1度でほぼ理解し、さらにそれを繰り返し質問することができるようになっていたからです。友人の話も同じです。いつも話しかけられるのを待っていた私が、自分から話しかけることができるようになりました。

留学初期は何に対しても、物凄く苦労しました。まず自分の英語が伝わらないし、相手が何を言っているのかも理解できず、混乱してどうしようもなくなるということが頻繁にあったからです。自分の英語に自信がないために話しかけることが怖くて、会話に対する恐怖心がさらに増し苦しい時期もありました。ところが2ヶ月を過ぎた辺りから自分の中で気持ちが吹っ切れて、何もかもガラリと変わりました。日本にいた時よりも自分が思ったことを素直に言う事ができるようになったのではないかと思います。それからはタイ人に限らず各国の留学生と頻繁に交流するようになり、様々な考えに触れ、自分が今まで考えもなかった観点から物事を考える機会が増えました。これにより長い間悩んできた自分の精神的・内面的な部分(アイデンティティ)が改善されたように思います。

2つ目に、工学的視点から私が感じたことに関して記述します。

私はSIITに在籍し、土木工学の講義を受講しました。基本的な内容は私が日本で学んだものと同様だったのですが、日本と違うと感じたところは、国際工学部と名が付くだけあって、タイの基準のみでなくアメリカ・日本など、他国の基準についても同時に言及しているというところです。国が

違って、そのものに対する根本的な考えは同じだということを繰り返しおっしゃっていた先生の言葉が頭に残っています。

タイ都市部のインフラストラクチャーは私が思っていたよりも進んでいたように思います。あまりに日本と似たような風景だったために、当初タイにいる実感がわかかなかった位です。しかしながらよく見てみると、路面が均一でなくガタガタする、雨季の長時間降水によりいたるところで洪水が起こる、またその後なかなか水がひかない(結果、交通渋滞・不衛生といった問題を引き起こす)といった問題がありました。これらに関しては私でなく誰が見ても明らかな問題であるにも関わらず、多くの学生が「そういうものだ」と認識しているということが分かり、まず認識から改善していく必要があるのではないかと思いました。日本とタイでの認識の違いを感じた瞬間でした。

また留学中に教授のご厚意により発電所の補修工事の下見に参加させていただきました。補修対象は鉄筋コンクリート製冷却ユニットで、それが冷却水中に含まれる塩分により鉄筋が膨張・破壊してしまっているというものでした。どこを見てもひび割れが激しく、錆びた鉄筋がむき出しになっており、いつ壁が剥離し倒壊してしまうか分からないという状況でした。この建物に関してはまだ供用開始から10年しかたっていないということで、発電所という公共的な建物がたった10年で使用不可能になってしまったという事に非常に衝撃を受けました。教授がおっしゃるには同じような状況の施設は他にも沢山あるそうで、こういった類の仕事はタイでこれからも増加するだろうということでした。しかしながら、タイ国内においてトップクラスに分類されるタマサート大学 SIIT においても、「維持管理」という分野にはほとんど触れられていません。こういった分野が今後どれだけ考慮されるのか、そして施工にどの程度反映されていくのかということが今後のタイのインフラを左右するところだと思います。

最後に、KUTとSIITを比較して私が感じたことのひとつに関して記述したいと思います。

SIITは国際工学部です。学生は皆、英語が使えるようになる必要があります。当然、全てのタイ人の学生が英語を得意とするわけではありません。ところが彼らは英語を話すことに対して物怖じせず、学内に多く在籍する留学生と交流しているのです。私はこれがKUTとSIITの決定的な差ではないかと思います。環境的にも雰囲気的にも、SIITでは簡単に留学生と接する機会を得ることができるのです。

KUTは国際工学部ではありません。しかし修士以上の留学生が何人も在籍しています。ところがとても勿体無い話で、その存在を知る人は少なく、研究室に留学生がいればまだいいのですがそうでなければ接触する機会は全くといっていいほどありません。また、留学生と聞くと構えてしまう人が大半で、話しかけられても何人が怖気づかずに会話できるのかという現況だと思います。でも留学生がいる以上、今後状況を変えることは可能であると私は考えています。この状況をうまくコーディネートすれば、SIITに匹敵するまではいかなくても、留学生と交流し、考えを深めやすい雰囲気ができるはずで、私も留学経験生ですので、留学先が留学生と接しやすい雰囲気であるというのは生活に馴染む上で大変助かりましたし、気楽に多くの人と接する機会を得ることができてとてもよかったです。留学生にとっても、KUT生にとっても、そういう環境や雰囲気

というものは大いにプラスになるのです。

以上のように、私は今回留学したことで当初の目標であった英語能力の向上と、それを通して多くの友人と関わったことで今まで自分が抱えてきた精神的・内面的な部分に関して考えを改める機会を得ることができました。これは私にとっては予想外でありとても大きな進歩でした。また、講義や見学を通して見た実際のタイのインフラの状況とこれからの姿を、今まで大学で学んできたことと照らし合わせて考える機会を得ることができました。

どちらも日本には間違いなく得ることのできなかつた機会に違いありませんし、今後海外で働きたい私にとってこれほど多くの考えに触れる機会を得られるというのはとても光栄な事でした。これからは今回のこの経験を活かし、日本人技術者として将来貢献することを目標に更に勉学に励んでいきたいと思ひます。

また、交換留学経験者の1人として、最後に記述したように今後のKUT生と留学生のあり方に関しても、できる限り関わっていきたくて思ひています。

以上